

# 報 廣 あかいけ

発行所 赤池町役場 編集 総務課 文書広報係 No.154号

## 町の人口

(50年2月末日現在)

男	4,349人
女	4,818人
総人口	9,167人
世帯数	2,793世帯

## 渡欧を終えて

赤池町長 池 永輝 昭

すすめられたフアエンツァ国際陶芸美術館は陶芸教室のすぐ近くにある。ツタで覆われた前庭のある静かな美術館である。毎年この町で開かれる陶芸展示会で展示された世界各国の優秀作品を永久保存する所であると同時に膨大なスケールの館に紀元二〜三世紀以来の莫大な量の古陶器をとこせましと保存陳列している。全ての古陶器がイタリアの伝統的紋様で出来ている。十六〜七世紀頃からそ

の紋様が中国的なものへと変わり、おそらくその時代から中国陶磁器の強い影響を受けたであろうことが一目でわかる。

日本からもいくつもの作品が寄贈されてその名がとどめられている。全く目をみはる歴史の保存とこれ程丁寧に考えるイタリアの人々に心からなる讃辞を捧げたい。歴史と伝統をもつわが上野焼にせめて万分の一の作品でも一堂に集めることができたらどんなにか素晴らしいだろう。

写真撮影は一切禁止され、入口でカメラなど保管されフィルムに納めることの出来なかったのが残念でたまらない。ポロニアに帰り着いた頃には日も暮れかかり雨もようの天気、風は冷気を伴い道に落葉が舞っている。

博覧会開催中の影響で街のホテルはどこも満室で泊れず止むなく教授の知り合いのホテルに工事中で休業のところを、事情を話して無理に泊めてもらう。

裏町のみすぼらしいホテルだったが、人のよさそうな主人が心よく承諾してくれた時は、本当にうれしかった。

八時すぎ、教授を誘って一緒に夕食に行き、昼間の話の続きを聞かせてもらう。一見、華やかにみえる外国での生活も、実際に自分で経験してみると惨めで淋しく、郷里日本への郷愁はいつまでも捨てがたいとのこと。ときたま日本に一時帰国する者がいると、誰れ

もが日本の演歌のレコード盤を注文すること、湯の町エレジ―等は最も愛されているらしい。こんな話をしみりと聞かされた時は、その心情が分る気がしてつい胸が熱くなり、もう何年も昔からの知己と向い合っている様な錯覚をする。時計もいつしか十二時に近い。お互いにつきぬ名残りを惜しみつつ別れる。

明けて十月十二日イタリア訪問の最大の目的である第十回FIERA(建設博覧会)を見学に行く。午前八時前だというのに雨の降る中、既に数千人の見学者が入口付近に黒山の人垣をつくって、九時の開場を待っている。おそらくヨーロッパ各地からその道の専門家達が、世界的規模の大博覧会につめかけて来たのだろう。

会場は十二棟の鉄骨、ガラス張りの常設パビリオンと屋外展示スペースからなっており、産業、建設機械からコンクリート製品、プレハブ住宅、組立プール、陶磁器、タイル等、平素建築に関係ある世界各国の新型製品が会場一杯に展示されている。

我々はタイル関係の展示品を重点に時間をかけてゆっくりと見学する。建物のあらゆる面にタイルは利用されており、ヨーロッパではタイルがいかに一般化され普及されているかが伺える。

第二次世界大戦後のわずか数十年の歴史でイタリアタイルを産業

(2) ページへつづく



(ローマにて) (ローマ遺跡を尋ねて)